

論文の要約

氏名 畠中愛美

本論文は『平家物語』諸本がそれぞれ独自に有する本文が、人物造型や場面にどのような影響を及ぼすのかを考察するものである。本文の多様性、流動性こそが『平家物語』という一つの作品に多くの世界観や解釈を与えている点に留意し、それぞれの本が有する独自の本文・表現に注目する。異同があることにより、人物造型や場面にどのような影響を与えるのか、また、編者にどのような意図があったのかを考察し、『平家物語』諸本という群を、個として見る意義を述べる。

第一章『『ゆらふ』考一覚一本の維盛像一』では、覚一本巻第五「富士川」における維盛が「ゆらへたり」と描写される点に注目した。これは維盛の大将としての不適格さを表す語と解されるが、語義を古辞書や同時代の文献等から確認すると、二つの力が闘ぎ合っている、力が拮抗しているために留まらざるを得ない状況が生じているものであることが分かった。また、諸本比較をし、維盛がこのように描写される際、侍大将忠清との対立が描かれている点にも留意し、富士川合戦における維盛像に検討の余地があるのではないかとした。

第二章「城方本の執筆意識一残される女性への視線一」では、城方本が語り本系、読み本系それぞれの影響を受けつつ、方向性を持って本文の取捨選択をしている可能性を提示した。中でも巴、小宰相、維盛北方、建礼門院等の描写や場面での扱われ方を諸本で比較し、戦乱によって別離を余儀なくされた女性達への関心がうかがえるとした。

第三章「南都本の『逆櫓論争』の扱い一景時への視線から一」では、語り本系と読み本系の性格を併せ持つ南都本において、逆櫓論争がどう捉えられているかを考察した。源頼朝の腹心である梶原景時が讒言によって義経の凋落を招いたことは、多くの『平家物語』諸本で共通する。南都本における景時の一谷合戦での活躍、また頼朝との関係を確認すると、景時が武勇に優れた思慮深い人物に造型されていることが分かる一方、義経との確執となった逆櫓論争では、義経とその部下達が景時を殊更笑い者にする記述となっている。二人の対立が表面化した逆櫓論争から、八島への遅参、先陣争いまで、景時が義経へ不信感を募らせていくさまを丁寧に描いているとした。

第四章「南都異本における平重衡の造型一遊君との関わりから一」では、南都異本の重衡海道下りに見える独自の地名や、列記の多さから、どのような意図があるのかを考察した。また、重衡が池田宿で遊君と出会う場面が独自本文となっているのは、王朝文学的な趣向を取り入れることで流離する重衡を強調しており、南都異本編者の王朝文学への興味関心がうかがえるとした。

第五章『源平闘諍録』における義経像』では、『闘諍録』の義経の人物造型が一般的な義経像と乖離していることに注目した。従来、『闘諍録』では義経・頼朝・景時の関係性が良好であると指摘されてきた。義経と頼朝、義経と景時の登場する場面を改めて確認した上で、義経が鴨越で道案内を求めた場面に、逆櫓論争に通ずるものがあるとし、他者と争わない義

経を描くことを徹底していると述べた。

以上の考察から、『平家物語』諸本がそれぞれに方向性を持ち、独自の世界観を有することを改めて示した。同一の作品でありながら大小様々な違いが生じることが『平家物語』諸本の特異な点である。流動的な本文がどのように享受されたのか、本文を選択する際の編者の興味関心、背景は何かといった問題は、本、或いは本文の位置付けを探る上での指針となろう。